

英語教材についての一考察

——コンピュータ利用により、語彙を中心に——

大塚 貞子・小野 祥子

はじめに

最近では人文系の研究にもコンピュータが盛んに用いられるようになって来ている。特に言語学では、語彙論、統語論、音韻論、意味論、文体論、テキスト編集、外国語教育など多くの分野でコンピュータを利用した研究がなされている。この中でも外国語教育はコンピュータ利用が大いに効果を発揮しうると考えられている分野の一つである。利用法の一つは CAI に代表されるような授業の場での利用法であり、もう一つは、教材分析などを通して授業計画の立案に役立てるという利用法である。¹⁾今回は、後者の観点に立ち、コンピュータ利用による教材の語彙分析を試みた。日頃「印象」にとどまっている、英語会話教材の持つ特徴を、数値を確認することによって客観的に認識することにより、どの様な点でこれらの教材が有益なのかを明確にできるのではないかと考えた。

資料：本学一年次 Oral English の授業で過去3年間に使われた下記の三つの英語会話教材（テキスト名の後の括弧内は略号）の中で、実際に学生がテープを通して耳から聞く会話の部分をコンピュータテキストとして用いた。²⁾

Meanings into Words (Intermediate) (MW) (1983, Cambridge University Press) (Units 1-24).

Building Strategies (BS) (1984, Longman) (Units 1-16).

BBC Beginners' English, stage 2 (BBC) (1988, BBC) (Units 1-30).

資料として用いた部分の総語数および総語彙数は次の通りである。³⁾

	MW	BS	BBC
総語数	14611	18109	25563
総語彙数	2123	2055	2448

上記の教科書はいずれもイギリスで編纂された non-native 中級学習者のための教材である。いずれも communicative approach の方法を採用している。つまり日常生活のなかの種々の具体的な状況を設定し、その場に適した英語の使い方を学習者が身につけられるように、系統立てて構成された教材である。取り上げられている場面は、主に次のようなものである：挨拶をかわす、許可を求める、人または物の描写をする、与えられた指示を理解する、天候の話をする、自分の好き嫌いを述べる、日常的な話題（例えば税金、教育など）についてディスカッションをする。このような内容を持った教科書を使用することでどのような語彙を学習者に習得させることができるのかを認識しておくことは英語の授業全体を考えるうえで役に立つのではないかと考える。

比較検討のために、JACET（大学英語教育学会）による JACET 基本語第二次案のリスト（3990 語、1983 年）を入力したものを使った。このリストは JACET が大学の教養課程で講読の授業を通して学生が身につけるべき語を選んでリストにしたものである。

方法：本学では大型計算機上で、OCP、SNOBOL が使えるようになっている。OCP は wordlist, word index および concordance をつくるためのプログラム・パッケージであり、SNOBOL は文字列処理のできるプログラミング言語である。この二つを用いて下に示すようなパラレル・ワールドリストおよび各テキストのコンコーダンスを作成し、上記の三つの英語教材の語彙についてその特徴を調べた。⁴⁾

パラレル・ワールドリストの例:

headword	MW	BS	BBC	ST	headword	MW	BS	BBC	ST
a*	428	536	634	1598	actress*	1	0	1	2
Aah	0	1	0	1	acts	1	0	0	1
abandon*	0	0	0	0	actual*	0	0	0	0
abandoned	0	0	2	2	Actually*	22	27	3	52
Abba	0	1	0	1	AD*	0	3	2	5
Abbey	0	2	0	2	Adams	0	0	1	1
ABC	0	2	0	2	Adam's	0	0	1	1
Aberdeen	0	2	1	3	adapt*	0	0	0	0
ability*	0	0	0	0	add*	0	1	0	1
able*	6	2	8	16	addict	0	0	1	1
aboard	0	0	0	0	addition*	0	0	0	0
abolish	0	1	0	1	additional*	0	0	0	0
about*	42	118	130	290	address*	3	3	5	11
above	2	1	3	6	addresses	1	0	0	1
abroad*	3	2	4	9	addressing	0	1	0	1
absence*	0	0	0	0	adequate*	0	0	0	0
absent*	0	0	0	0	adjective*	0	0	0	0
absolute	0	0	0	0	adjectives	0	1	0	1
Absolutely*	3	1	1	5	adjust*	0	0	0	0

(ST=total)

上の表の中の数値は、各教科書にその語が現れた回数を示す。0 は、その教科書にその語が現れなかったことを示す。単語の肩にアスタリスク (*) が付いているのは、その語が JACET のリストに含まれていることを示す。ただし実際にこのようなリストを使う場合注意しなければならないことがある。コンピュータは、単語を文字列としてのみ認識するということである。例えば、kind という語は、名詞 (「種類」) の場合と形容詞 (「親切的な」) の場合とがあるが、このような品詞の区別をコンピュータはしない。一方動詞の sing, sang, sung, singing をコンピュータは、全く別の単語として頻度を計算するが、実際これらの語は一つの単語 (正確には lexeme) の変化形として扱われるべきである。これらの問題点を克服するためには、一つの語形を品詞ごとに (場合によっては意味ごとに) 分けたり、いくつかの語を一つのグ

- having 19
- 2.8 Jane yet? Hi, Charles. Yes, we have. I'm having a mixed grill and Alan's having a steak
- 2.8 Jane I'm having a mixed grill and Alan's having a steak. well, I know what I'm going to
- 2.8 Charles any. That's a pity. What wine are we having? We're not. We're having beer. Beer
- 2.8 Jane wine are we having? We're not. We're having beer. Beer? But the beer's awful in
- 6.9 Sue you were in Spain. Yes, I am. And I'm having a marvellous time here. What's the
- 6.9 Sue in a café by the beach. Jill and I are having a drink here and writing our postcards
- 6.9 Mike and saying what an awful summer we're having. Oh dear —still, I expect you're
- 6.9 Mike now. Actually, at this very moment I'm having a break and making myself some coffee
- 8.9 INT got quite brown. You've obviously been having some reasonable weather here. Now what
- 8.9 Kevin: round Italy on coach tours and having a fantastic time. And one of them has
- 11.5 C People admiring my clothes. Yes, I like having my clothes admired too. You travel a
- 18.9 Woman weren't so worried about children having to work in mines, the main thing they
- 24.9 B And another reason it's worth having special lanes is that it would
- APPEND LS6 Drill 2 cut. why does the phone always ring I'm having a bath? Martin was having a bath when
- APPEND LS6 Drill 2 ring I'm having a bath? Martin was having a bath when the phone rang. It's
- APPEND LS6 Drill 2 does the alarm always go off when I'm having a nice dream? Martin was having a nice
- APPEND LS6 Drill 2 I'm having a nice dream? Martin was having a nice dream when the alarm went off. I
- APPEND LS8 Drill 2 had her first French lesson. She's been having French lessons ever since she met
- APPEND LS8 Drill 2 had their first argument. They've been having arguments ever since they got married
- 4.8 Puppeteer head 5
- 4.8 Puppeteer make a rag doll puppet—you make a head exactly as if you were making a rag
- 4.8 Puppeteer finger and you can control the puppet's head when you're using it. What about the
- 4.8 Puppeteer take a matchbox first to prepare the head,—just the cover of a matchbox—and
- 4.8 Puppeteer in place on the forefinger, where the head would be. Then you arrange the
- 19.1 B cars. Mm. Where do you think he'll head for, sir? Well, he definitely won't try

ループにまとめたりという、いわゆる lemmatisation を手作業で行わざるを得ない。この作業のためには、concordance の作成が必要になる。

いわゆる KWIC (key word in centre) の format になっていて、key word が中央に配列され、教科書のどのセクションのどの人物の発話の中に現れたかが、記号によって左端のコラムに示されている。

1. JACET 基本語リストとの比較

今回使用したリストは、1983 年の「JACET 基本語第二次案 (revised)」のなかで提案されたものであり、総語数は、3990 である。このリストは、大学英語講読教科書のあり方を考える過程で立案されたもので、大学の一般教養課程終了時に recognition vocabulary として習得されているべき下限の目安であるという（選定のプロセスについてはこの冊子の前半を参照）。

このリスト（以下 JWL）と上記の三つの教材の語彙をパラレル・ワードリストで比べて見た（6490 語が対象となった）。話し言葉を中心としてイギリスで native speakers によって編集された会話教材と、日本の英語講読教材を対象としていて当然書き言葉の比重が大きいであろうと思われる JWL とでは、先に示したように語彙の総数が異なるだけでなく、おのずと語彙の性質が異なることが予想される。その差から会話教材の語彙の特徴を考えてみる。

1.1 JWL にあっても三つの教材には全く現れない語（約 1700 語）

本来、話し言葉は書き言葉より語彙が少ないと言われている。それに加えて、三つの教材の総語彙数（各々 2123 (MW), 2055 (BS), 2448 (BBC)) が多いとは言えないことなどを考えれば JWL にあっても教材のなかに現れなかった語が多数あるのは当然といえる。しかし、内容をみてみると次のようなことが分かる。この中には、英語のごく基本的な語彙も多く含まれている。例えば、*Cambridge English Lexicon* (1980)⁵⁾ では、First Certificate in English を満たすと考えられる基本語 4470 語を、より基本的と考えられるものから順に level 1 (598 語), level 2 (617 語), level 3 (992 語), level

4 (1034 語), level 5 (1229 語) というふうに 5 段階に分けている。今回資料に現れなかった語の中からいくつかを level ごとに列挙してみる。特に, *Cambridge English Lexicon* で level 1~3 に入る語は約 2000 語であるが, このような最も基本的と考えられる語の中にも三つの教材でカバーされないものが少なからずあることが分かる。

level 1	level 2	level 3	level 4	level 5
airplane	careless	forbid	ambulance	analysis
blackboard	among	former	doorway	assignment
grandmother	balloon	highly	income	cabbage
narrow	basket	outdoors	misunderstand	completion
rich	illnesss	single	package	deceive
sheep	monthly	skill	proposal	geometry
whom	packet	sale	technical	permission

level 1 の whom が資料にみられなかったのは, 口語では who が whom を殆ど完全に駆逐していることを明確にしている, 興味深い。MW, BBC では目的格と考えられる関係代名詞, 疑問詞を, すべて who で学習させている。

もう一つの特徴は, この約 1700 語の中の約 490 語は抽象名詞あるいはそれに関連する動詞, 形容詞であるという事実である。例えば:

administration, altitude, benefit, capacity, contribution, dimension, finance, freedom, gravity, integration, justice, precision, religion, variable, variation, vice, victory

ところで, 「文部省検定済高等学校用英語教科書使用語彙」(1987, 垣田・三浦)⁶⁾ は, 中学校用の教科書 19 種類, 高校用の教科書 74 種類(代表的な教科書は網羅されている)で学ぶべき新語として挙げられている単語をすべてコンピュータに入力し, 各々の単語が 93 種類(特に高校の教科書 74)のうちのいくつの教科書に出現するかを一覧表にしたものである。この表によれば, 例えば citizen は中学の教科書では 1 つ, 高校用では 18 の教科書で新語として出てくる。しかし, citizenship は高校用英語 IIB の教科書 1 つに出て

くるだけである。この表で上に述べた JWL にあって会話教材になかった抽象名詞を調べてみると、これらのうちの 290 語は高校用の教科書で出現する率の低い語であることが分かる（全体の約一割である 7 つ以下の教科書にしか現れないものを出現率の低い語とした）。次のような語が挙げられる。

高校用教科書 74 種類のうち学習すべき新語としてあげている教科書の数ごとの例（実際は多くても 30 を超えることはない）：

0	1	2	3
administration	commerce	controversy	emphasis
legislation	friction	excess	investment
4	5	6	7
publicity	consequence	humanity	capacity
tension	sin	mercy	criticism

このように、大学で教養として習得すべき語彙という観点からみると、高校で学んでいる可能性が少ない抽象名詞が、会話教材では十分カバーされないのではないかとと思われる。

1.2 JWL に収録されていないが会話教材に現われている語（原則として固有名詞は除く）

JWL には収録されていないが、会話教材に現われている語は、2000 語以上ある。これらの中から、MW, BS, BBC のうちの少なくとも二つに出てくる語は、76 語である。⁷⁾ 当然のことながら、多くは下に示すような日常生活に関連の深い語である。（下線を施した語は三つの教材すべてに出現した語である。語頭の*は、頻度の高かった語を示す。）

armchair, aspirin, *book (v.), bookshelf, *bye, café, chess, chip, cooker, crisps, cycling, *cyclist, dancer, disco, drinks (n.), *exam, ferry, hairdresser, hairstyle, heating(n.), housework, *jeans, long-distance, madam (vocative use), menu, parsley, racing, raincoat, *running (n.), saucepan, sightseeing, sleeves, *sofa, squash, striped, tablets, towards, wardrobe, washing-up

さらに数は多くないが興味深いのは、下に示すような感情（しかも、どちらかといえば否定的な）と関連するような語、およびいくつかの副詞がこのグループに特徴的であると言う点である。

apologise, complaint, criticise(d), depressed, depressing, disagree, hopeless, horrible⁸⁾, horror, ridiculous, shocking, unpleasant basically, definitely, enormously, immediately, incredibly, nicely, *properly, quickly, *regularly, slowly, *terribly, unfortunately（これらのうちのいくつかの語を含めた口語に特徴的な副詞については、2.5 参照。）

これらの語を上記の高校教科書のリストで調べると、日常生活関連の語のなかで chess, dancer, exam, housework, madam, menu, sightseeing, sleeve 以外の語は高校で学ぶ可能性が少ないと思われる語であることが分かる（五つ以下の教科書でしか新語として扱われていない）。一方、感情に関わる語、および副詞として挙げた語の多くは高校で習得済みである可能性が大きい。ただし会話教材で頻度の高い depress, depressing（計 15 例）はほとんどの高校教科書で取り上げられていない。

さきに述べたように、JWL で取り上げられていない語で、三つの教材のどれか一つに現れる語は 2000 弱あることになるが、これらを概観すると、やはり上で述べた日常生活に深く関連した語が多いと言う傾向がはっきりみとれるのである。これらの中から、高校教科書で学習される可能性の特に低いものとして、上述のリストを参照して 0~1 冊の教科書にしか現れない語を選び、主なものをグループに分けて示す。

職業に関する語：

adviser, botanist, chancellor, coastguard, constable, consulate, courier, fire brigade, freelance (journalist), manageress, programmer, receptionist, shoemender

服装・髪・色などに関する語:

anorak, auburn, beige, bikini, curly, fair-haired, full-length, furry, high-necked, jumpsuit, layered, light coloured, lining, long-sleeved, open-necked, polo-necked, pullover, sequinned, sweat-shirts, tan, tattoos, tweed

建築物・家具・施設などに関する語:

airfield, attic, bed-and-breakfast, boarding, courtyard, divan, footpath, kitchenette, launderette, mortgage, polytechnic, sit-u-up, skylight, verandah

食物に関する語:

almonds, celery, corkscrew, curry, custard, garlic, grated, grill(ed), hard-boiled, ingredients, kidney-pie, marmalade, mashed potatoes, offhand, paprika, recipe, scone, vinegar, yoghurt

天候に関する語:

blast, bleak, coastal, drizzled, (weather) forecast, foggy, gale, humid, overcast

病気・体に関する語:

anti-rabies, cholera, disease-resistant, floss, infected, injection, malaria, pills, rabies, smallpox, stomach-ache, typhoid, (stomach) upset, vaccine, viruses

以上のように、会話教材の語彙は、数の点からは多いとは言えない。特に抽象概念を表すような語を学習する機会が十分与えられないのではないかとと思われる。また基本的な日常語彙も教材でカバーされていないものが見られる。このような欠落の見られる一方、これらのイギリスで native により編纂された会話教材には English-speaking society での日常生活に密接に結び付いた語が豊富に現れる。このような語は多くの場合 JWL にもなく、高校でも学習している可能性が少ないことを考えると、やはり native により編

纂された教材を使うことにはこの点で大きなメリットがあると考えられる。これらの特徴を踏まえて、英語の学習全体を効率のよいものにする工夫が必要であろう。

2. 三つの教材に見られる特徴

MW, BS, BBC は 1 年次英語会話のクラスで過去 3 年間にわたって用いられた教材である。各々の教材の学習目的とシラバスについて、どのような特徴を出すべく編纂されたものであるかを述べておく。まず、MW は「communication の場において、学習者が表現したいと思う意味を語に持たせるための手段としての文法」⁹⁾を中心としたコースである。すなわち概念の表現と文法構造の選択を関連させることを目指しており、機能文法重視の傾向にある教材と言えよう。BS は「社会における学習者の communication のレパートリーを増やすこと、より複雑な談話において要求される言語技術を作り上げること」¹⁰⁾を目指している。そのシラバスは言語形態 (structural) よりは概念・機能のカテゴリー (notional/functional syllabus) をより重視している。一方、最も新しく出版された BBC は「国際的な communication の言語としての英語の多様性を表現し、且つ社会的、職業的な文脈における簡潔で、効果的な communication に必要とされる言葉を取り扱う」¹¹⁾という学習目的を掲げ、BS と同じように社会性を目指すと共に、国際性と簡潔さをも目指している。

以上のように三つの教材のシラバスには多少の差異がある。当然、語彙、表現の特徴には三つに共通のものも、三つ各々に差のあるものもある。以下にこれらの特徴を述べる。

2.1 縮約形

口語では否定語の not, 助動詞が各々 n't [nt/n], 've [v], 's [z] と短縮された形で用いられることは広く知られているところである。今回の三つの教材でも、当然のことながら、非常に多くの縮約形が見られた。これらの縮約形がどのような語結合で現れるかをコンコーダンスを用いて調べて見ると、結合の

範囲が非常に広汎にわたっていること、その一方で縮約形の中に固定した言い方で頻繁に用いられる傾向のものが分かる。¹²⁾

2.1.1 n't (否定の副詞 not の縮約形)

be 動詞との縮約形 (am は not と縮約形を構成しないので除外):

	isn't	aren't	wasn't	weren't	's not	're not
total	93	36	31	15	38	17

have, do および法助動詞との縮約形:

total		total		total	
haven't	71	don't	291	can't	81
hasn't	12	doesn't	59	couldn't	19
hadn't	1	didn't	112	mustn't	5
				needn't	2
				shouldn't	25
				won't	75
				wouldn't	25

これらの縮約形は否定の陳述文および付加疑問文の tag に現れる。縮約されない is not, are not, cannot, must not, need not etc. は現れない。shall は否定では shall not でも shan't でも使われていないので上の表には含まれていない。ただし, be 動詞がその前にくる語 (主に代名詞) と縮約形を構成する場合は, not は短縮されず, he's not, we're not のようになる。しかし, Quirk (1985) が指摘するように, この形の否定は, 頻度が低いことが上の表から分かる。¹³⁾

このように, not が上のような種々の助動詞と結び付いて用いられる場合その大半は縮約形で学習される。

2.1.2 be 動詞の縮約形

am, is, are は各々短縮された形 'm [m], 's [z] 're [ə] をもつ。次頁に各縮約形およびそれに対応する非縮約形の頻度を示す。

	total		total		total		total		total
'm	414	they're	81	we're	27	you're	101	's	933
am	30	they are	7	we are	7	you are	27	(noun+'s 87)	
								is	550

縮約形 'm (I'm の形でのみ用いられる) と非縮約形では圧倒的に縮約形の頻度が高い。's は人称代名詞, 疑問詞, 副詞および種々の名詞 (固有名詞, 普通名詞) との多様な結合で使われていて, 頻度も is より高い。¹⁵⁾ 上の表に示した 's の頻度の下段の括弧の中は代名詞でなく名詞との結合で用いられている回数である。次のような結合が見られた:

everybody's (1) everything's (2) here's (7) he's (76) how's (4) it's (351)
she's (60) that's (205) there's (79) who's (16) what's (73) where's (22)
when's (5)

名詞の場合:

Alan's, bed's, beer's, car's, dinner's, London's, plane's etc.

have の縮約形 's (= has), 've (= have), 'd (= had) (括弧内は非縮約形):

's	he's	24	've	I've	181	'd	I'd	9
	it's	24		we've	25		we'd	4
	she's	19		you've	43		you'd	34
	that's	1		they've	19		he'd	5
	there's	1		who've	1		she'd	6
	what's	1		where've	1		they'd	3
				should've	1		which'd	1
total		72	total		271	total		62
(has		99)	(have		561)	(had		124)

have は代名詞だけでなく, 疑問詞, there, should などとも多様な縮約形を構成している。's, 've は 's got, 've got, 's been, 've been の言い方で現れる場合が非常に多い (ただし have は be 動詞に比べて縮約形になる割合が低い)。'd は 'had better' の短縮されたものとしての用法が頻繁である。's (= has), 'd (= had) は各々頻度の高い is, would と同形の縮約形になるので,

文脈を聞き取って理解する訓練が重要であろう。

法助動詞の縮約形 'd (=would), 'll (=will):

下の表に見られるように、代名詞との縮約形のなかでは I'd の形が突出して頻繁に使われている。これは、I'd like to...., I'd love to.... の言い方が非常に多く現れることによる。

'd:	I'd	we'd	you'd	he'd	she'd	which'd	total
	74	1	1	2	2	1	81

'll (括弧内は頻度):

I'll (113), we'll (26), you'll (33), he'll (21), she'll (19), it'll (10), they'll (10), that'll (2), there'll (13), plane'll (1) (計 248 例, これに対し非縮約形の will は 131 例)

代名詞, および there に隣接する will は縮約形が用いられることが非常に多いことが分かる。

非縮約形が使われるのは疑問文 (Am I....?), 文末 (I'm sure I will.), 倒置構文 (So am I., Neither am I.) のような限られた構文である。とくに縮約されない are は Here we are!, There you are!, So you are! のようなある程度固定した表現で現れる場合が多い。have は 'have to' の場合や, 「持っている」という意味の場合には短縮されない。¹⁶⁾ 一方, 非縮約形の would, will は would you....? のような request 表現で最も頻繁に現れる (2.2 参照)。

以上のように, これらの教材では, 使用範囲が広く頻度も高い縮約形を使いこなし, 聞き分ける能力を身につける学習を行わせている。

2.2 request 表現

口語英語の特徴の 1 つは, 相手や状況によって formal や informal の様々な段階での表現を使い分けて, 丁寧な (polite), 如才ない (tactful), 親しみを込めた (familiar), ためらいがちな (tentative) 等の気持ちを表現することである。

3 つの教材に出て来る request 表現 (「～してくれますか?」) にも次のよ

うな informal なものから formal なものまで種々の言い方がある。各々の教材の代表的な例を informal なものから順に以下に示す。¹⁷⁾

- | | |
|---|---------------------------------|
| 1) Will you pay? (MW) | informal
↓
formal
(MW) |
| 2) Can you tell me where the theatre is? (BBC) | |
| 3) Would you give an advice on clothing? (MW) | |
| 4) Could you answer the phone? (BS) | |
| 5) Would you mind bringing a bottle of wine? (MW) | |
| 6) Could you possibly give me a lift to the station? (BS) | |
| 7) Do you think you could possibly lend me your bicycle? (MW) | |

上記の表現のうち 1), 3) よりは 2), 4) の方ががより polite で tactful である。6) のように possibly をつけ加えたり, 7) のようにより間接的な質問の形で依頼を表す方がさらに polite で tactful である。各々の表現の頻度は次のようになる:

request 表現の種類	MW	BS	BBC
1) Will you...?	2	0	0
2) Can you...?	4	2	12
3) Would you...?	1	0	0
4) Could you...?	2	17	4
5) Would you mind...ing?	8	0	0
6) Could you possibly...?	0	1	1
7) Do you think you could possibly...?	1	0	0
total	18	20	16

MW ではその functional grammar 中心という特徴を反映して, 6 種類と最も多様な表現を学習させるようになっている。しかも would you mind...ing? という polite な表現が中心になっている。BS と BBC は共に informal な 2) と neutral かやや formal な 4) 中心という傾向を示す。しかし BS では, 4) の neutral な表現を中心に学習させているのに対して, BBC では 2) の informal な表現の方に重点が置かれている。

その他に命令形に please をつけて politeness を表現しているものもある。それらの頻度は MW 4 例, BS 5 例, BBC 16 例であった。BBC で please が多いのは, このテキストが簡潔な表現を主に学ばせることを目的としていると言う特徴の現れであろう。

さらに request 表現の 1 種である permission を求める, 「～しても良いですか?」という表現がある。資料中に見られる表現を informal なものから formal なものの順に示す。

- | | |
|---|----------|
| 1) Can I smoke here? (BS) | informal |
| 2) Could I leave a message? (BBC) | |
| 3) Is it all right if I leave my rucksack on the back seat?
(MW) | |
| 4) Do you mind if I take a photograph of you? (BBC) | |
| 5) Would you mind if I took my jacket off? (MW) | |
| 6) May I come and see it this afternoon? (BS) | formal |

各表現の頻度:

permission を求める表現の種類	MW	BS	BBC
1) Can I...?	11	15	10
2) Could I...?	3	0	5
3) Is it all right if I...?	1	0	0
4) Do you mind if I...?	0	2	8
5) Would you mind if I...?	5	0	0
6) May I...?	1	10	1
total	21	27	24

MW が 5 種類, BS が 3 種類, BBC が 4 種類の表現を学習させている。ここでも MW が最も多くの種類を学習させている。BS は informal な Can I ...? と polite な May I...? の 2 つに集中して学習させている。また, BBC は 4 種類の表現を学ばせてはいるが, Can I...?, Could I...?, Do you mind if I ...? も含めて, 全体的にみると informal な表現を中心に学習させている。これ等の傾向は request 表現の場合と同じである。

2.3 advice/suggestion の表現

advice/suggestion の表現も、状況に応じて formality の段階に応じた使い分けをするが、advice の場合はその目的上 tactful, tentative などの気持ちを込めた formal な表現をせざるを得なかったり、表現上は advice でも実際は丁寧な命令であることもある。以下にその例と頻度を挙げる。

- 1) I think you'd better ask someone else. (BS)
- 2) I think you ought to take an umbrella. (BBC)
- 3) You should take a holiday. (MW)
- 4) If I were you, I wouldn't eat so much. (MW)
- 5) Let's get down some details. (BS)
- 6) Shall we do something exciting this evening? (BS)
- 7) What about accommodation? (MW)
- 8) How about playing tennis on Sunday? (BS)
- 9) Why don't we listen to some jazz? (BBC)

You'd better... は informal, You ought to..., You should..., If I were you, I... はどちらかと言えば formal な advice 表現である。逆に, Let's..., Shall we...?, How about...?, What about...? は同程度に informal で familiar な suggestion 表現である。ただし, Why don't we/you...? の表現は advice, suggestion のどちらにも分類できる。

advice 表現の種類	MW	BS	BBC	Suggestion 表現の種類	MW	BS	BBC
1) You'd better...	7	6	15	5) Let's...	4	26	5
2) You ought to...	3	7	9	6) Shall we...?	4	5	1
3) You should...	6	1	5	7) What about...?	12	25	33
4) If I were you, I...	3	0	12	8) How about...?	2	10	6
total	19	14	41	total	22	66	45

*9) Why don't we/you...? (MW: 4, BS: 18, BBC: 5)

表からみると MW と BBC は共に 4 種類ずつの表現を学習させるのに対し, BS は request 表現と permission 表現の場合と同じように 2 種類の表

現に集中して学習させている。(What about と How about は同じ使い方の表現とみることが出来る。) また BBC は What about...? の informal な表現を他の 2 冊のテキストに比べるとかなり多く学習させている。

2.2, 2.3 で述べたように, request, permission, advice/suggestion の表現については, 状況や対話の相手に応じた様々な使い分けを学習させることが三つの教材に共通する姿勢であることが分かる。¹⁸⁾ ただし三つの教材にはそれぞれの特徴がある。MW は機能文法重視の姿勢を反映して一番種類を多く学習させている。BS は特定の表現を重点的に学習させている。BBC は簡潔で informal な表現を目指していると言えよう。

2.4 fillers (間をとるための言葉)

口語では書き言葉のような書き直し, 推敲の時間はないので, well, er, erm の様な語を言葉の合間にいれて口ごもりながら, 相手の反応を見たり, 考えをまとめたりしながら話す。このような機能で使われている語 (表現) を下に挙げる:

	Well	well	eh	em	er	erm	uh	um	hm	hmm
MW	49	8	2	0	16	0	0	6	0	5
BS	152	9	0	0	21	0	3	5	0	0
BBC	112	16	1	4	24	7	2	0	7	6
total	313	33	3	4	61	7	5	11	7	11

特に well と er の頻度が高い。文頭の Well が非常に多く, Well.... と言いながら文を始める initiator¹⁹⁾ としての用法が多いことを示す。これに対し文中の well は Oh, well..., 等の様に, いわば相手の質問に反応して使う場合に多い。言葉に詰まったとき, 一呼吸置きたいとき等に使われる hesitation filler と呼ばれる er, um, uh 等の語も随所に見られる。これらの教材が自然な会話に近い言葉のやりとりを学習できるように構成されていることが分かる。

その他に, yes の casual alternative として使われている mm, mmm, uh huh, yeah 等や, filler に近い働きで使われる you see, sort of 等がある。

各々の頻度を下の表に示す。mm が MW と BS ではかなり多く使われているが、BBC では他の 2 つで使われていない uh huh や yeah が使われていることに注目したい。

	Mm	Mmm	Uh huh	Yeah	you see	sort of
MW	15	2	0	0	10	0
BS	19	1	0	0	5	1
BBC	4	0	2	5	2	1
total	38	3	2	5	17	2

頻度は少ないが強い感情を表す次のような exclamatory expressions がある。3 つの教材に現れた表現をまとめて挙げる。全体的にみて fillers と同様に、このような感情を表す表現は BS と BBC に多くみられる。

〈満足の気持ち〉 aah (BS: 1), ah (MW: 7, BS: 3, BBC: 13)

〈驚きの気持ち〉 oh (MW: 83, BS: 173, BBC: 149), ooh (MW: 1), gosh (BBC: 1),
really (MW: 14, BS: 21, BBC: 14)²⁰⁾, oh dear (MW: 3, BS: 8, BBC: 8)

〈悲しみの気持ち〉 alas (BS: 1)

〈拒否・嫌悪〉 blast (BS: 1), damned (MW: 2), oh heck (BBC: 2),
nonsense (MW: 10, BS: 1), What a shame! (BS: 1)

〈喝采・乾杯〉 brava (MW: 1), cheerio (BS: 2), cheers (BS: 5), salut (BS: 1)

〈相手に注意を促す〉 hey (MW: 3, BS: 1, BBC: 4)

〈静かにの意味〉 ssh (BS: 1)

2.5 intensifiers

本来の意味とはなれて、程度を強める intensifiers として形容詞や副詞が用いられるのは口語の特徴である。例えば, awfully や terribly 等は「恐ろしく」と言う元の意味でなく次のような使い方で、後に来る語を単に強める働きをしている。また, fantastic, great, marvellous, terrific も 'good' や 'nice' の emphatic equivalent として用いられている。用例と頻度を下に示す:

Oh, here it's absolutely boiling. (MW)

He's got an awful cold. (MW)

Oh, boots, definitely.²¹⁾ They're much more comfortable. (BS)

I'm terribly sorry—I didn't realise. (BBC).

It was great to see you, Robert. (BBC)

I'm terrific at cooking, you know. (MW)

intensifiers	MW	BS	BBC	total
absolutely	3	1	1	5
awful	4	11	6	21
awfully	0	1	0	1
definitely	1	2	0	3
horrible	1	2	0	3
terrible	5	0	4	9
terribly	5	1	4	10
fantastic	7	2	3	13
great	2	10	11	23
marvellous	2	4	5	11
terrific	2	0	0	2

2.6 地 名

ワードリストを見ると、地名の多さが目につく。今回の Corpus 全体の中で、地名の総語彙数は 233 である。

地 名	MW	BS	BBC	total
英 国 総 語 彙 数	17	41	20	60 ²²⁾
その他の地域 総 語 彙 数	42	131	122	233

上記の表から分かるようにどの教材でも英国以外の地域の地名の数が、英国内の地名の数の数倍にもなっており、三つの教材が共に標榜している国際性を重視する姿勢が反映されていると思われる。そしてそれらの地名はヨーロッパ、アジア、アメリカ等、世界中の広汎な地域から取り上げられている。特に BBC は英国以外の地名の割合が、MW, BS に比べて著しく高い。BBC はその目的として 'To encourage and explore the use of English as a medium of international communication.' ということを掲げており、その

ための international settings が特徴である。そのことが語彙の中でも地名に顕著に現れていることが分かる。以下に資料に見られた地名の例と頻度を挙げておく：

英国内の地名（頻度順）：

London (59), Bristol (31), Scotland (21), Edinburgh (14), Inverness (12), York (9), Manchester (6), Birmingham (4), Aberdeen (3), Glasgow (3), Liverpool (3), Cambridge (2), Bournemouth (2), Newcastle (2), Paddington (2), Southport (2), Dundee (2), etc.

その他の地域の国名・地名（頻度順）：

〈国名〉 Sri Lanka (23), Canada (20), Spain (15), France (14), Italy (13), America (11), Japan (9), Australia (5), Ceylon (5), Ireland (4), Yugoslavia (4), Denmark (3), Indonesia (3), Mexico (3), Soviet (3), Egypt (2), Ethiopia (2), Greece (2), Sweden (2), Taiwan (2), China (1), Germany (1), Holland (1), Kenya (1), Norway (1), Venezuela (1), etc.

〈地名〉 Barcelona (27), Majorca (19), Colombo (8), Milan (8), Paris (7), Rio de Janeiro (6), Catalan (5), Dublin (4), Hamburg (4), Tokyo (4), Toulouse (4), Winnipeg (4), Florence (3), Hollywood (3), Madrid (3), Perth (3), Banff (2), California (2), Bogota (2), Copenhagen (2), Dubrovnik (2), Rome (2), etc.

む す び

本学1年次 Oral English で用いている中級会話教材を資料として、コンピュータにより作成したワードリストおよびコンコードンスを利用して、資料に見られる特徴のいくつかを明らかにした。語彙全体を見ると、今回の教材に現れなかった語の中には難易度の低い日常語と見なされる語もかなりある。さらに抽象的な概念を表すような語彙で大学教養過程での習得が望まれる語もこれらの教材に含まれていないものが多い。この点で、会話教材でカバーできる語彙には限界があることは明らかである。しかしその一方で、こ

これらの native により編纂された教材には実際の日常生活に密接に結び付いた語で、日本で作成された講読教材や高校教科書では学ぶ機会の少ない語が豊富に現れており、この点においてこれらの教材は日本の学習者にとって非常に有益であろうと考えられる。その他今回の資料に見られた特徴としては、次のような点があげられる：1) not, be 動詞, have, will, would の短縮形の広汎な使用, 2) 種々の fillers, 3) 口語特有の intensifiers, 4) situation に応じた request 表現の使い分け, 5) 英国以外の地域の多彩な地名。以上のように今回取り上げた教材は、non-native の学習者にとって有益な口語英語の特徴を豊富に備えており、自然な日常会話を学習させると言う目的に大いに適ったものであると言える。²³⁾

注

- 1) この点に関しては、C. Butler (1985), Part I に語彙論, 統語論, 音韻論, 文体論の各分野でどのようなコンピュータ利用が可能かが論じられている。
- 2) S. Hockey (1980), *A Guide to Computer Applications in the Humanities* は、コンピュータテキストを作成する時に特に留意すべき点, コンコードンス作成時の注意, コンコードンスを利用してどのようなことができるか, また実際どのような研究がこれまでなされてきたか, と言うようなコンピュータ利用による語学的研究の基礎的知識を教えてくれる有益な書物である。ただし、ハード面ではこの本の出版当時から現在までの間に大きな進歩があり、彼女の指摘が必ずしも当てはまらない場合もある。Sinclare (1991) はコンコードンスを用いた collocation の研究について詳しく述べている。
- 3) 総語数はすべての語を1回と数えた場合の語数。総語彙数は、何回でてきても同じ語形は一回と数えた場合の語数である (of が228回でてきても語彙数のなかでは、一語とみなされる)。
- 4) OCP による出力結果を SNOBOL によるプログラムで処理してパラレル・ワードリストを作成した。東京大学教授山縣宏光氏の御好意によりプログラムは、東京大学大型計算機センターニュース 22 巻 7 号 pp. 49-59 に掲載されたものに手を加えて使わせて頂いた。今回本学の OCP, SNOBOL は正常に動いたが、残念ながら資料のサイズの関係でうまくいかない部分があり、実際の作業には東京大学大型計算機センターのメインフレーム上の OCP, パソコン用の SNOBOL 4 を使った。本学情報処理センターの幸田さん、宮沢さんには大変お世話になったことをお礼申し上げる。
- 5) *Cambridge English Lexicon*, Hindmarsh, R. X., Cambridge University Press, 1981.
- 6) 「文部省検定済高等学校英語教科書使用語彙」三浦省五編, 垣田直巳監修, 溪水社, 1987.

- 7) JWL からぬけているのは、派生語、品詞転換による語などで頻度が高くないと考えられるとか、合成語で意味が自明であるとかというような理由であろうと推察されるものもある。
- 8) horrible については、類義の awful, terrible の方が頻度が高いが, ridiculous (3 例) については crazy が 3 例見られるが, absurd, laughable, ludicrous の例はない。その他の語については特に注目すべき類義表現はない。
- 9) Doff, A., Jones, C. and Mitchell, K., *Meanings into Words, Intermediate, Teacher's Book*, Cambridge University Press, 1983, p. 12.
- 10) Abbs, B. and Freebairn, I., *Building Strategies, Strategies 2, Teacher's Book, Longman*, 1984, p. v.
- 11) Garton-Sprenger, J. and Greenall, S., *BBC Beginners' English, Stage Two, Teacher's Book*, BBC English, 1988, pp. vii-viii.
- 12) テープで縮約形で発音されている場合必ずテキストでも縮約形で書かれていることは確認済みである。
- 13) Quirk (1985), *A Comprehensive Grammar of the English Language* (Bibliography 参照), p. 123.
- 14) 例外は次のようなものである。
We are alone in the universe (BBC).
You are in a friend's house (BS).
- 15) Quirk は代名詞, here, there は縮約形, 名詞の場合は非縮約形が普通であると言っているが, 名詞の場合も縮約形はかなり多く使われている。
- 16) Quirk の指摘どおりである。p. 123.
- 17) ここに挙げてある request 表現は *A Communicative Grammar of English*, (Leech, G. and Svartvik, J., Longman, 1975) と *English Grammar for Communication*, (Devitiis, G. de, Mariani, L. and O'Malley, K., Longman, 1989) を参照して, formality の段階で順に列べてあるが, 学者によってその基準は違うことがあり, また実際の使用の場面での表現の仕方によっても必ずしもより formal であるとか, より informal な表現であるといえないこともある。
- 18) request 表現は教室や LL で繰り返し学習させて効果を挙げている。
- 19) Quirk はこのような well の使い方を initiator と定義しているが, Leech (p. 114) は attention signals としてこれから新しい考えを述べる際に使われると述べている。
- 20) 実際には (Oh) Really?, Really!, ではイントネーションが異なるが, ここではこれらの表現をまとめてある。
- 21) definitely はこのような filler に近い働きで使われている。
- 22) 語彙数の total が 3 つの教材の合計と合わないのは重なっているものがあるからである。
- 23) 本校執筆に際しては, 文理学部英米文学科教授東山節子先生に数々の有益な助言を頂いたことを記すと共にお礼申し上げる。

Bibliography

- Butler, Christopher, *Computers in Linguistics*, Basil Blackwell Ltd., 1985.
 Devitiis, G. De, Mariani, L. and O'Malley, K., *English Grammar for Communication*, Longman, 1989.

- Garside, Roger, Geoffrey Leech and Geoffrey Sampson (eds), *The Computational Analysis of English—a corpus-based approach*, Longman, 1987.
- Hockey, Susan, *A Guide to Computer Applications in the Humanities*, The John Hopkins University Press, 1980.
- Leech, Geoffrey and Jan Svartvik, *A Communicative Grammar of English*, Longman, 1975.
- Quirk, R., Greenbaum, S., Leech, G. N. and Svartvik, J., *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman, 1985.
- Sinclair, John, *Corpus, Concordance, Collocation*, Oxford University Press, 1991.
- Willkins, D. A., *Notional Syllabus*, Oxford University Press, 1976.
- Hofland, Knut and Stig Johansson, *Word Frequencies in British and American English*, NAVF, The Norwegian Computing Centre for the Humanities, Longman, 1982.
- 斎藤俊雄編「英語英文学研究とコンピュータ」, 英潮社, 1992。
- 『英語講読用教科書のあり方』についてのアンケート調査報告書—「JACET 基本語第2次案」を中心に—, 大学英語教育学会教材研究委員会, 1983年3月。
- 三浦省五編, 垣田直巳監修「文部省検定済高等学校用英語教科書使用語彙」, 溪水社, 1987。